教育実習がネガティブな経験としてではなく、自身の適性を見極める経験として捉えることで、「野外活動を極めたい」という気持ちを強くしたＫは、例外的な事例として興味深い。施設での野外活動の経験に魅力を感じたことを以下のように述べている。

「学校とは違うっていうよりかは、どちらかというと、普段学校ではなんかあんまり目立ってないような子とか、少し配慮がいる子でも、ほかの子たちと一緒に、同じように活動できているっていうのが、自然体験活動の中だったら、メリットというか、魅力なのかなって思います。」

しかし、この判断自体も野外活動の指導に専念したり、企画したりすることの方に自身の役割を見出した上での評価である。Ｋは、さらに言葉を重ねる。

「そうですね。最近考えていることでは、子どもと関わるのが好きですけど、あんまり得意じゃないっていうことを、最近思うようになって。子どもに話しかけたりとか、そういうのが少し不器用というか、あまり上手くないので。なんかメインで子どもたちの前に立っているよりかは、さっきも言ったように、裏で企画したりとか、サポートする側にいるほうが自分は向いてるのかなって思うようになりました。」

Ｎは、教育実習よりも早期に実施される「観察実習」で自分の中でモヤモヤが芽生えたという。２年生の夏か秋のことである。といっても、単に消極的な意味ではなく、教育学部で学んだことを生かせるという考えから、自動車教習所指導員という仕事を選んだという。教員の仕事が正当に評価されていないという現状への不満もある。

「そうですねやっぱ教師になると、かなり子どもと密接に関わるというか、小学校だったら６年間ずっと一緒ですし、中学高校でも３年間一緒になるわけで、そう考えたときに、自分の趣味とかっていうのを優先できないというか、やっぱりどうしても生きていく中で、やっぱり子どもが第一になっちゃうというか、その面で、なんでしょう、自動車学校との差があるというか。」

しかし、教員の労働をめぐる客観的データからも明らかなように、教職から距離を取らせたり諦めさせたりするほどに教職をめぐる現実は危機的状況にあると映ったケースの方がはるかに顕著である。多くのインタビュイーがこの種の意識変化をたどっていた。いくつか例を挙げてみる。

まず、公務員より早く決まりプライベートも大事にできることなどの理由で最終的には大学職員を選んだ Ｆ も、実習時の肯定的変化とその後の否定的変化を「良くも悪くも教員